

松山鋼材

生産現場の
ダイバーシティ

勤務するインドネシア出身の従業員

環境整備
選ばれる会社に

松山鋼材(千葉県旭市、向後賢司社長)は、外国人技能実習生が働きやすい職場環境の整備に力を入れている。現在は社員全体の約3分の1に相当する40人のインドネシア実習生が、鋼材加工の現場で働いている。技能実習生の帰国後を視野に入れた技術的な教育に加え、国籍や宗教の違いを理解し、モスクの建造など必要な環境を整えて働き手から選ばれる会社を目指している。

松山鋼材は1997年から外国人技能実習生の受け入れを始めた。インドネシアからの技能実習生について向後社長は「彼らなくして(当社)今日がないと言っても過言ではない」と強調。勤勉なインドネシア人の働きぶりに謝意を示す。

一方で近年、韓国や中国、タイなどもインドネシアの人材を積極的に採用しており、「働く人が(働く国を)選ぶ時代が来ている」(向後社長)。そのため業務内だけでなく、業務外でも生活しやすい環境づくりを進めてきた。インドネシア人はイスラム教徒が多く、毎日の礼拝を欠かさない。当初、同社の敷地

内に礼拝の場所がないことが課題になっていた。インドネシア出身者の増加に伴いモスク設置の要望が出たことを受け、建築に必要な費用を会社側で全額負担し、モスクを建造した。現在では休憩時間などの礼拝場所として使用されている。

会社負担 敷地内にモスク設置



インドネシア出身者によって作られた敷地内のモスク

業務外でも社員間の懇親を深めるため、コロナ禍以前には年に4-5回、全社員が参加するイベントや国内の観光名所への旅行などを企画し家族に近い関係を築いてきた。向後社長の「仕事のルールで厳しくすることはあっても、仕事以外のことでストレスを

ポイント

向後社長は技能実習生たちの話をするとき「子どもたち」と表現する。人を大切にすると職場の雰囲気は、来訪した取引先にも安心感を与えるなど経営面でもプラスの効果を生み出している。

与えないように」との思いから、今後も海外の人材の活躍に必要な環境を整備して、一層の事業の成長につなげる。(千葉・八家宏太)